

序にかえて

——『幹部闘争から大衆闘争へ』復刻の現代的意義

森 直 弘

内山光雄著『幹部闘争から大衆闘争へ』の復刻を求める声が高いという。私は、内山さんの、最も近いところにいた者として、喜びとともに誇りさえ感じる。

いまは、一九五〇年代の労働運動にくらべ、とりまく状況は一変している。にもかかわらず、なぜ、『幹部闘争から大衆闘争へ』が、関心をよび、復刻の声さえ出るのだろうか。

ともあれ、本書は、日本の戦後労働運動が一九五〇年代に、転換を迎えた時点での、一つの訴えの書であった。本書のタイトルは、その訴えを合言葉的表現で示したものであるが、同時に、当時の支配的地位であった、政党や労組幹部のひきまわしから解放され、組合員大衆を、組織の主座にすえようとするたたかいの実験記録とでもいうべきものであった。

いま、いわゆる少数派運動の担い手たちが、本書に注目している模様である。もちろん、八〇年代の労働運動を活性化しようとする多くの活動家たちからも、大きな関心がよせられているようだ。

その人たちは、「幹部闘争から大衆闘争へ」の旗じるしの下で展開された、北陸鉄道労働組合の「職場闘争」から学ぼう、ということのようである。字義に即して、その戦闘性を思い、その闘争の組織、闘争の方式について学び、当面の運動にどう適用するかをさぐるう、とするもののようなのである。が、その学習による、実践的な有効性は、どのようなものであろうか。いまのところそれは明らかでない。私は、労働運動や労働組合の現状を見ていて、組織は、一応の成熟性を示しているが、「運動」の主体となっておらず、むしろ「経営」の対象にされてしまっていることに、不満と不安を抱いている。

運動の理念は不透明だし、余りにも合理主義的、官僚主義的でありすぎることに批判的である。そこで、運動の方位をどこにとるか、その方法は具体的にはどのようなものかを考えつつ、結局、「職場闘争」の復活を唱えるに至ったのである。そこで機会あるごとに、北鉄労組の職場闘争に即して語りつくすことを自分に課した仕事としている。――職場闘争は、物とり闘争ではなかった。職制征伐でもなかった。まして山猫争議のすすめなどであろうはずがない。単なる団交の前段形態でもない――これらのことを明らかにしようとしている。さらに、この闘争の性格を、組織づくり、団交権の確立のたかいという視点からとらえていることも、自説として説いている。

大衆闘争は、幹部が指導性を放棄したり、大衆追隨に陥ることではない。そのため、北鉄労組では、幹部の指導性とは何か、を具体的に問いただし、大衆追隨にならぬよう警戒したのである。幹部と大衆の結合こそが、運動発展の契機である、ととらえたからであつた。そして、幹部と大衆をつなぐものを、「指導」と「信従」の人間関係に求めた。それは、支配、服従関係と根本的に異質なものをえらんだ、ということである。

こうした指導、信従関係の成立があつてはじめて、大衆闘争は、有効性を發揮できたのである。そこには、幹部と大衆の間にかもしだされる人間的ぬくもりがあつたし、爆発的エネルギーをひそめた熱氣もたたえていた。

私たちの、この運動に注目した学者があつた。労働者の社会的役割を明示する透明な理念にみちびかれ、人間による主体的運動にしようとする試みと解した人のひとりに、藤田若雄教授があつた。そして、私たちもまた、藤田教授の「誓約集団論」を、魅力あるものとして迎え入れることができたのであつた。

「職場闘争」は労働者を職場の主人公とし、職場に労働組合を根づかせることをねらつたものである。職場の民主化は産業民主化の原点である、との自覚もあつた。そのたたかいはやがて、「明職運動」として展開され、その延長線上に、時短、雇用拡大、職場環境の改善など数々のたたかひがあつた。それぞれ成果をあげた。が、成果はそれにとどまらない。職場の労働者の団結が強まり、たたかう組織の伝統が形成されたことこそ最大の成果だつた。

企業内の職場闘争を中核としたたたかひの社会的影響は、地域住民の日常生活に及ぶことをも知つたのである。これは、労働者階級にとって貴重な覚醒である。そこで、北陸鉄道を「県民の足」とする運動の展開と、地域社会での労働者の組織化を試みるに至つた。しかし、これは、いわば実験的なものに終わり、未解決の問題を多く残したままとなつてゐる。

ついでにいえば、あの軍事基地反対闘争、「内灘闘争」は、こうした組合活動の外延化と関係づけて理解すべきだ、ということである。そう説くことは、少なくとも北鉄労組の組合員大衆には説得力を

もつてであらう。単に反米、反戦、平和闘争で一くくりにできないものをもっているのである。

さて、本書から学ぼうとする活動家の共通認識は、日本の労働運動の危機、ということであらう。

そして、労働組合の仮性成熟から抜け出し、組織の真性成熟を希う人々にちがいない。とすれば、一九八〇年代の労働運動の行方 zu 思いをはせる人々にとって、本書はたしかに一つの道標とならう。私はそうなることを信じ、期待もしている。